思議の佛智を信ずる所なり、一念同時と知べし、夫で終りに之を結で、さてこの信ずる心も念ずる心も彌陀如來の御方便よりをこさしむるものなりとの玉ふ、上の六通りの言を指して、さて此信ずる心も念ずる心もとあり、而して彌陀如來の御方便よりをこさしむるものなりとおもふべしと結ぶ、然ればこの蓮如上人の御心は、たゞこの後生たすけ玉への信心一つを得させんがために、心を盡したまふ御文なり、初にたのむ歸命を、たすけたまへの言を以て釋成してみせ玉ふ、次に略してたすけたまへを辯ずる、此たすけ玉へと申すは、古ひ處では弘法の大日經開題に出たり、歸命にたすけませの假名付してあり、次が黑谷傳さて拾遺古德傳に、東大寺大衆が法然上人を禮拜して、たす

けませと云たことが出てあり、さて後生たすけ玉へと熟語してあるは、鎭西の向阿上人の指要決所々に出てある、是は蓮師より餘程古ひ人なり、言は之等により玉ふ歟、さき御一代記には此後生たすけ玉へと教へたまふ所で、中興上人と申し奉るとある、然れば大切な御言なり、又御本廟に於ては、年々毎の報恩講に、改悔の批判をなされる、是三百年來の行式となりてある然れば後生たすけたまへの安心は、一流に流れを汲む輩らは心を盡して研究すべきことなり、さきにこの助けたまへの言を解するに就て、有人の說に三義を設けてある、一には請求の義、二には敎令の義、三には許可の義、此三義の中に於て、許可の義を以て正義とすると申してある、その時にはたゞ受込み呑込

むことを許可と云ふ、所謂る信順の義となるなり、仰せに順ひ召にかなふて信順するが、後生たすけ玉へちや、之は三業破斥のこゝろから、行者の能歸を拂ふて、知らず〳〵法體募りになりゆく教へ方なり、今私に存ずるに、此後生たすけたまへと云は、唯信鈔にたゞ信心の手をのべて誓願のつなとるべし』とある、あの誓願のつなを取ると云が、たすけたまへとすがるこゝろであろう、既に論主の願生安樂國とのたまふたを論註に釋して、天親菩薩歸命之意也と、夫を後生たすけたまへと云は、迷の娑婆を離れて、證りの淨土へ生れ度ひと、彌陀をたのむこゝろで、言ばに述てみれば後生たすけたまへとなる、顯名鈔に快樂のためにきゝてねがひ、ねがひてかの生因をたづね、たづねて念佛に歸し、歸して淨土に生じ、生じぬれは無生を證し』と八苦充滿の世界にありて淨土を欣求して、遂に本願名號の謂れを聞て、彌陀をたのんで淨土に往生すると云、そこで無上菩提の信心には、自ら願生心は具はる、單の願生にはあらず、御一代記に極樂はたのしむときゝてまいらんとねがひのぞむものは佛けにはならずと、論註に淨土の快樂を聞て生れんと願するは烟のなき火を求むるが如く、水のなき氷を求むるが如しと呵し玉ふ、今は往生を願ふではなひ、後生たすけ玉へと彌陀をたのむ意は利他他力の信心の味ひで、自ら迷ひを離れて證りの淨土へ生れさせて下されいの願ひなり、願々鈔に、信心歡喜の念佛衆生、みなこと〴〵く一念欲生のきさみ正定聚に住す』とある

又次に欲往生の深信發得するは、しかしながら法藏因中の强願と、正覺の彌陀の智力と、內薰密釋するによりて一念歸命の往益を成ず』と云ひ、後に願樂欲求の心とある、彌陀をたのむ人に願生の思ひなひ人はなひ、之は他力の願生、それで助けたまへと云は、たすかる緣手がゝりの盡た所へ、たのむものを助けやうの本願の勅命をきくゆへ、身も心もたすけたまへの思ちや夫を蓮師言をかへ玉ひて、阿彌陀如來の御袖にひしとすがりまいらする等と、或は彌陀一佛の悲願にすがりて等とのたまふ、すがると云を左傳に縋と書て、夜縋城出とある、記事珠では攀の字を遣てある、然れば二種の信心の領解になりてみれば、名號の謂れを聞うれば、一念御たすけたまへの心の起るところ、

そこが直ちに仰せに順ふところ、然れども此が後生たすけたまへちやと、心の中に求るには及ばぬ、彼後世物語に、至誠深心廻向發願心の謂れを述て、かくのごとくこゝろうる後には、心中に三心の義を求むべからずとある、唯我身は淺猿き機なりと思ひ取りて、かゝる機までもたすけ玉へるほとけと知らば、無途とすがる思ひより外はない、此思ひを述てみれば、後生たすけ玉へとすがるより外はなひ、有人云く、たすけ玉へは願心、たのむは信心と釋して、さて其信心と云と願心とはもと不二ちやと、乍去暫らく義に就て前後に分ては、助けたまへは初めにあり、たのむは後にありと、如是辯ずる人がある、今評じて云く助けたまへは願心と云こと未だ曾てきかざる所なり、御文にた

信願異解

正・撮

鎮西今家同異

すけましませと思ふ等とありて、ねがふこゝろとはなひ、文に忽ち違す、又たすけ玉へが初一念、たのむ心は後念なりと云はゞ、一念歸命にあらずして二念歸命と云べし、又信と願とは不二にして、願心が卽ち信心、信ずるが故に願ふと、前後はなひと云申し方なれども、此義甚だ然らず、信とは決定に名くる、願とは希求の義なり、信と願とが不二とは云はれぬ、是願生歸命を募る一類の云ことなり、今御正意では、信ずるがたのむなり、たのむが信ずるなり、その信心を得てみれば、自ら願生は備はる、たすけ玉へと云へばとて、願生の義にはあらず、さて略して鎮今同異を辯ず、一に鎮西は心存助給で、一生が間だ思ひつゞける常だのみで、今家は一念歸命の立所に往生定まる、常だのみにはあらず、二に鎮西では只後生たすけ玉へとたのむけれども、如來の御助けを貪着せぬ、今家はかゝる機までもたすけたまへる佛けと知て、後生たすけ玉への意がおこる、三に鎮西は後生たすけ玉へとたのめども、定散心に迷て、まかせることが出來ぬ、今家の後生たすけ玉へは、往生の一大事は佛にまかせ參らせて、往生治定の覺悟になる決定心の人なり、四に鎮西はたすけ玉へは趣向の義で、こちらから持かける、今家の意ろは、われを一心にたのまん衆生をたすけんとある、彌陀招喚の勅命釋迦發遣によりて、たすけ玉への思になる、五に鎮西では臨終まで往生治定の思ひがない、今家では後生たすけ玉への一念の起り場が、早や往生の定り場なり、更に不定の思ひはな

ひ、一寸當てみれば、一心一向に阿彌陀如來たすけ給へとふかく心にうたがひなく信じて等、一念の信心さだまらん輩は、十人は十人ながら百人は百人ながら、みな淨土に往生すべき事さらにうたがひなし』此御文みるべし、たのむものを助るの勅命を聞て、さては我等如き徒らものを、たのむばかりでたすけましますは阿彌陀如來御一佛と、すがる思ひの露ちり程もうたがひのなひのがたのむ一念の場所なり、末燈鈔に、往生ほどの一大事等、これ等の文を以てみるに、彌陀一佛の悲願にすがる思ひが、その儘たすけ玉への思ひなり、夫を言に述てみれば、後生たすけたまへとたのむになるなり、三に言をかへて教へるの例、是は或はき丶開く、或はき丶得る、すがる等と、凡そ言の

かはりた所ろ二十品ほどあり、先づ問云く、今家に於ては黑谷上人御相承ましまして、我祖念佛往生を深く弘通し玉ふ、卽ち第十八願を念佛往生の願と名けて、口稱念佛を勸める、然るに御文に於ては第十八の念佛往生の誓願と標し乍ら、口稱の念佛を勸めぬは云何、答云く、總じて此御文に破邪顯正を辯ずる、ときに只稱への念佛を破するのが破邪の一科なり、是蓮如上人の御時代には、念佛さへ申せば佛になられると、多分鎭西流の念佛を稱へる時節ゆへ、その口稱念佛を遮して、弘願他力の信心を教へたまふ、然れども口稱の御勸なしと云にはあらず、卽ち信後の稱名を教へ、帖外御文に、その趣きほゞ顯れたり、とき夫に就て少し簡ばねばならぬことあり、先づ本朝に於て念佛

を弘通したること、鎭西宗要二五九十念佛興行四度と定めてある一には聖武皇帝の時、行基菩薩の念佛、二には延喜帝の時、空也の念佛なり、三には花山帝の時、源信和尚、四には隱岐院の時、法然上人なり、此事は何に依たもの歟其據を知らず、今私に之を論ずるに、凝然の淨土源流章十右四に、本朝に於て念佛を稱へた人が十一人擧てあり、其第一第二が智光禮光なり、終の第十が天台の勝範、是等の十人は多く等持定の念佛なり、少しく散心はある、第十一が法然上人選擇集の選述まし〳〵て、初めて淨土宗を立てゝ、大に義理をあらはすことある、此時に當て淨教甚だ盛なりとある、然れば念佛を稱へることは甚だ古ひことなり、然れども多くは定心念佛にして他力の念佛にあらず、

依て黑谷先德を念佛元祖と云、善導流の念佛此に於て始まるなり、先づ、

第三十五會

次に念佛の種類を辯ず、都て此念佛の種類和漢に涉りて三類となる、一に定心別時念佛、二に散心常時念佛、三に事理雙修の念佛、此三類を以て和漢の念佛を盡す、第一定心別時の念佛と申すは、念佛して見佛を要期する、卽ち觀念法門に其作法出たり、五右より八左まで入道場の作法があり、此ときは口稱念佛は稱へ乍らも、手に珠數さへも持つべからず、唯合掌して見佛の思

古歌

ひをなせとあり、漢燈九善導傳に出たり、三十餘年間一心に專念佛シテ、涕唾便痢不レ向ニ西方一、洗浴之外不レ脫レ衣とある、とき此善導の御行狀は、四律五論を以て糺すに、尙ほ未だ善導の行狀には及ばぬとある、是が定心念佛なり、三昧發得する、往生要集下本に別時念佛が明してある、さて珍海決定往生集九右、近くは鎭西宗要四五丁に詳かに釋してある、さて上來智光より十一人の中、多分この定心念佛、空也や遊行等の念佛が散心を重にするけれども、矢張り定心が勝れる、その事は一遍語錄に出たり藤澤藏版なり、『山河の水に流るゝ土地がらも、身をすてゝこそ浮む瀨もあり』と云安心なり、此捨ると云が肝要なり、語錄下四十二空也上人へ念佛は云何申すべくやと問たれば、其答へにす

散心常時

皆往院說

てゝ、こそとの玉ふた、夫で次に一遍が釋して、念佛行者は智慧もすて、愚痴をもすて、地獄を恐るゝ心をもすて、極樂をねがふ心をもすてゝ、念佛するが彌陀超世の本願にかなふと云定心念佛なり、其事が西行選集鈔三十六に引て辨じてあり、尙又空也繪詞傳と云もの三卷あり、詳かに安心が述てあり、多分定心にして、少しく散心を兼る、皆見佛を期する、さて二に散心常時念佛、これは欣求淨土の心がけで、來迎を期する所の念佛、三經所說の念佛、かの禮讃の、文珠般若によりて一行三昧を敎へ玉ふが散心常時念佛、とき皆往院の說に、四帖疏皆散心念佛さて具疏は所々定心の念佛をすゝめ玉ふと申されたり、觀念法門等然り、さて橫川は定散二種の念佛が勸めてあり、中末八丁散

事理雙修

心念佛、同下末十二左直ちに散心念佛とあり、さて小經略記三十是には但信の念佛、『夏ころもひとへに西を思ふかな、裏なく彌陀をたのむ身なれば』鎭西に云但信にはあらず、夫に元祖は往生之業念佛爲本と相承したまふが、横川散心念佛を相承したまふ善導流の念佛こゝで初めて顯はるゝ、夫を鎭西で、慧心に因明直辨、三經の手前では散心の念佛を正とすると云ふ据り、又善導は本願强緣と云、然れば黑谷今家の相承は此善導流の念佛なること明なり、さて三に事理雙修の念佛、これが飛錫の念佛三昧寶王論、法照禪師の五會法事讃、あれが慈愍三藏の念佛を傳へた、先づ理とは眞如の理のこと、口に稱ふる念佛が、實相の理に契ふと云、所謂る無想離念の念佛、夫で念卽無念とある、

往生卽無生を第一義と云、終日念佛して常に眞性に契ふと云、卽ち妄念を脫却して、無心になりて念佛する、是が先づ理念佛事念佛と云は散心念佛のことで、夫を寶王論下四丁に、直ちに無心事理雙修の行と云がある、夫を是は事と理と並べ修する念佛故に、定心の念佛とも定め難く、散心の念佛とも定め難ひで、之を事理雙修の念佛と云、五會法事讃上四右念佛三昧〻理事雙修、相無相念卽與〻中道實相〻正觀〻相應と、事理雙修の念佛、如〻是、ときに我祖行卷に、此寶王論幷に五會法事讃を御引用、我祖何の心ありて之を依用し玉ふやと云に、行卷の方には直ちに念佛三昧は三昧中の王なりと讃嘆してある、是一、さて又眞佛土卷では起信論が引てある、然るに之を古來の學者、起信論ちやと

思ふゆへ解せぬ、樹心錄等實に暗天の飛礫、こゝ之は寶王論によりて起信論を引たもの、是我祖の御釋が、上來涅槃經を永く引用まし〳〵て、其終りの結釋なり、此念より無念に入ると云所を、念と云は信心佛性のこと願生心のことゞや、無念と云は妙覺究竟の果のこと、此意を以て寶王論幷に五會讃をみるべし今鎭西などが、因分可說果分不可說と分ち、發迹入玄門、施化利生門と分て、但信の念佛を勸む、十八通第一重に於て詳かに明す、夫で日本中念佛三昧になりた、此に於て蓮師念佛往生の願をかゝげて、而も此謂れを知りたる人こそほとけにはなるべけれと、廣く聞其名號の信心を勸めたまふ、問云く今家に於て信心佛性を談すること上來の如し、然るに涅槃廿四十六廿五十一左

十住菩薩少分見佛性と說せられてある、卽ち眞佛土卷に引用なり、こゝ此經文忽ちみれば、初地の菩薩のことを說かせらるゝに似たり、然るに倩經意を窺ふに、眼見と聞見との二を立てゝ十住菩薩は佛性を聞見すれども了々ならずとある、さて諸佛世尊は目に佛性を見玉ふこと掌中の奄摩羅果の如しとある、此相違如何が解するや、答云く、凡そ涅槃經をみるに、十住菩薩と云は第十地の菩薩のことなり、其故は同く涅槃經三十四丁七に、一切衆生乃至九地直聞見佛性とある、然れば眼見位は佛果の位なり、其餘は悉く聞見位なり、さて又次に、佛果を究竟覺と名けて、是は眼見する、未だ究竟に至らざるものは聞見すると說せられてある、そこで我祖の釋を見奉るに、眞佛土卷には、初

地と見ても見らるゝなり、けれども正く涅槃經の意によれば第十地の菩薩のことなり、依て經に衆生未來等と、この未來と云は佛果のことなり、第十地から妙覺を見て云ことなり、此に於て八地已上を一子地と名くる、章安涅槃疏十七六十三義を設けて釋する中、第二義が八地以上とある一子地釋、そこに初歡喜地を極喜地と名くるは、若人善心を起すを佛詠めて極愛地と讃嘆し、又惡心を生ずるを緣じては、之を一子地と名くるとある、惡ひことするならさせておけと云こゝろ、そのことは淨影涅槃義記五下四十五左に釋してあり、學寮藏書なり、問云く御文の上に於てたすけ玉へと彌陀をたのむと云は、何れ第十八の三信なることと明なり、三信中何れによりて助けたまへとの玉ふや、答云く蓮

師豫て此義を知らしめして、一帖目御文並に四帖目初通に行者歸命の一心なりと決擇なされてある、然ればたすけたまへと彌陀をたのむは、論主の御指南、問云くその理命を聞く、然るに論主は是因人なり、願くは佛說を聞んと欲す、答云く、之を答るは五帖目御正忌なり、そも〳〵信心の體といふは經にいはく、聞其名號信心歡喜といへり、善導のいはく南無といふは歸命、またこれ發願廻向の義なり等、又御一代記には、彌陀をたのめとのたまふは阿彌陀如來ぢやとあり、今何ぞ聞其名號信心歡喜と云や、解して云く、十七十八更不相離、行信能所機法一と、所信所行の南無阿彌陀佛を、南無とたのめば必ず阿彌陀佛のたすけまします道理なりと聞て、雜行雜修をすてゝ後生たすけ玉

一心體相

へとたのむが、第十八願の三信のこゝろなり、依て論主三心卽一心と釋し玉ふ、其一心の相たを知んと欲せば、彌陀に歸命するこゝなり、一心は信心の體、歸命は信心の相、此歸命が後生たすけ玉へとたのむ相たなり、然れば後生たすけ玉への上におひて、續不續の義を論ずべからずと雖も、今その義を示しおく

續不續

一帖目通二如來をたのむこゝろのねてもさめても憶念の心つねにしてわすれざるを、本願たのむ決定心をえたる信心の行人とはいふなり」是續の方、さて五帖目通十四なを〳〵ふかく彌陀如來をたのみたてまつるべきものなり」と、御一代記左六彌陀をたのむこころにて往生決定と信じて、ふたごゝろなく臨終までこをりさふらはゞ往生すべきなり」論註では「心々相續無他想間雜」

或は「念相續」心不斷にて往生す等、先づ續の邊の御言なり、又一念に限ると云は、帖外御文通第一この上にたすけたまへとおもふべからず」さて一帖目通三たすけましませとおもふこゝろの一念の信まことなれば、かならず如來の御たすけにあづかるものなり、このうへにはなにとこゝろえて念佛まうすべきぞなれば往生はいまの信力によりて、御たすけありつるかたじけなき御恩報謝のために等とある、信卷時節に約して一念を釋する、さて一帖目通七たすけたまへとおもふこゝろの一念をこるとき、かたじけなくも如來は八萬四千の光明をはなちて、その身を攝取したまふなり」二帖目通九このうへにはたゞねてもおきてもへだてなく、念佛をとなへて、大悲弘誓の御恩をふかく報謝すべ

きばかりなりとこゝろうべきものなり』然れば攝取不捨に預りて往生治定のうへに、たすけたまへの思ひあろう道理なし、二帖目（通十四）その他力の信心のすがたといふは、いかなることぞといへば、なにのやうもなくたゞひとすぢに、阿彌陀如來を一心一向にたのみたてまつりて、たすけたまへとおもふこゝろの一念をこるとき、かならず彌陀如來の攝取の光明をはなちて、その身の娑婆にあらんほどは、この光明のなかにおさめをきましますなり等と、二帖目（通十五）初めに、二種深信の相たを述て、終りにかくのごときの信心を一念とらんする事は、さらになにのやうもいらず、あらこゝろえやすの他力の信心や』と、如是立敵共に文あり義あり、然れば一邊に執すべからず、若之を詳かに知らんと欲せば、安養に至りて證すべきものなり、あなかしこ〳〵、

大正五年十一月初三日立太子式日校正了

山城國山科村居住

木全義順

眞宗詮要 終

跋

此講述は、余が亡父堯心法師の藏する所なり、然りと雖も親しく聽記するにあらず、他人の筆錄を求め所藏となすのみ、余其筆錄を校正して護法館主に謀る、館主資を投じ以て世に公にす良誓員外擬講は、大和國奈良德願寺（當時奈良御坊と稱す）に住す、唯識華嚴に長じ、殊に宗部に力むる處あり、員外擬講に昇らざる以前にして、高倉大學寮に於て紐解く書目を列擧するに

文政四年　起　信　論
天保七年　瑜　伽　釋
弘化元年　一心二門大意
萬延元年　五　教　章

大學寮沿革略に載する處なり、而して此講述は、安政四年なる歟と推定す、理由とする所は、第十八會に、卽ち此間の講釋の如しとは、安政四年の春講法宣師の易行品をさし、第二十一會に、一昨年講說に出たりとは、安政二年夏本法院講師の往生禮讃を指たる歟、後賢の考に任す、若し推定年次を以てする時は今を去る六十一年前の講述なり、其吐ところ妙味を示し、其論ずるところ基礎をなす、末法は信心淺けれども、敎海本より深ければ、學佛徒を裨益するに於て少なしとせず、世に公にする所以なり、刻成る、之を驥尾とすと云爾、

大正六年三月　山城國山科村居住　木全義順　識す

大正六年四月八日印刷
大正六年四月十五日發行

正價　金壹圓貳拾錢

著者　相續人　奥林俊一
校正者　木全義順
發行兼印刷者　西村九郎右衞門

發行元　京都市下珠數屋町　西村護法館
振替口座　東京四五九七　大阪一〇二九〇

不許複製

（眞宗詮要奥附）

寶章研究の最要指針

最新刊＝特價提供

龍山慈影講師題辭
南條文雄先生序文
大須賀秀道先生參訂
威力院福田義導師著

御文講義 一五帖部

四六判活版四號文字全二冊
(甲種)クロース背金文字入紙函入全二冊
(乙種)和洋裝紙帙入全二冊
特價 金壹圓五拾錢 (郵税金拾貳錢)

威力院講師の『御文講義』は師の述作中の第一位に置かるべき大著述にして、簡潔明淨の辭を以て殆んど其蘊蓄を披瀝し盡くして餘す處ろ無し、其識見の高きと考證の博き尋常緇流の冗講と其軌を異にし、創見あり、系統あり、苟くも寶章を體得せんとする人々に唯一の鍵鑰たり宗侶諸氏の一讀を薦む

325
485

終